



食人学園

作者 大黒達也

官能SF人肉小説『食人学園』
一・はじめに

近未来の日本。アジア征服を目論む中国との核戦争により、東京都内にあるX学園の生徒達は、学校の地下に造られたシェルターに閉じ込められる。

学内では、生徒達による食糧や美少女をめぐる、権力闘争が繰り広げられる。凶暴な性格の総番長達により、狩集められる美少女達や美人教師達。彼女達は、激しい陵辱の末に、食糧として……

二・登場人物 倉木隆一

若い女性をレイプしようとしていた暴力団員五人を素手で病院送りにした武道の達人。身長百八十センチ以上の長躯と、全身バネのようなしなやかで、強靱な肉体の持ち主。ルックスも良く、正義感もあるが、猪突猛進という欠点も持っている。

香月里奈

1 校内一の美少女。コンピュータ技術に精通し、コンピュータを駆使し校内システムに入り込み様々な情報入手する。

気は強いほうで、思い込んだら何が何でも実行しなければ気が済まないタイプ。悪に対しては、断固立ち向かう勇気を持ち合わせている。

桜井美佐、狩野里香

里奈に劣らぬ程の美少女達。普段は隆一のオツカケをしている。ふたりとも素直で正義感が強い。

工藤亮介

X学園の総番長として、生徒達から恐れられてい存在。地元暴力団組長の息子であり、校内に拳銃やドスを密かに持ち込んでいるとも噂されている。

冷酷で凶暴な性格。校内の食糧と美少女達や美人教師を我が物にしようとして、隆一達と対立する。

三・本編

第一章 プロローグ

西暦二千*年、中国は台湾を平和的な手段で併合し、東シナ海全域を支配しつつあった。武力を使用しない侵攻に対し、米国や日本は何も為すすべがなかった。

中国による台湾併合は、日本のエネルギーや物資輸送の大動脈であるシーレンに多大な影響を与えつつあった。

日本政府は中国との戦争に向けて、準備を始めていた。そのひとつが軍事工場や高速交通網を大深度地下に建設するといふものであった。それらの施設以外には、学校などの公共施設も地下に建設し、中国による核攻撃に備えようとしていた。

3

東京都内にある男女共学のX学園もそのひとつであった。季節は冬、寒々とした二月の中旬。学園に通う一部の生徒達は、大学進学に向けて土日も学校に出ている。校舎は新築間もないものであった。外部から眺めると、木々が繁茂する公園にしか見えない。敷地の片隅に目立たないように、地下校舎に繋がる入り口が見

えていた。

三年A組の男子生徒一名と女子生徒二名が、窓も無い廊下を歩いていった。少年は身長が百八センチ以上あり、四肢が長く目鼻立ちが整っていた。美丈夫といえるだろうか。美しいだけではなく、全身からオーラのようなものを漂わせていた。少年の名は、倉木隆一。中学時代、通りすがりに暴力団によるレイプ事件を目撃し、ヤクザ五人を素手で病院送りにした武道の達人であった。

付き従う少女ふたりも、身長は百七十センチほどで、モデルのように美しい容姿をしていた。ひとりは桜井美佐。もうひとりは狩野里香という名であり、ふたりともミスコン優勝の経験者であった。少年はポケットに両手を入れ、無言で歩いていった。少女達が笑顔で話しかけても、軽く頷くだけで、決して会話を盛り上げようとはしない。少女達も別に気分を害するわけでもなく、楽しげに少年の背中を見詰めていた。

彼らの前方から、十数人の男子生徒が

ゆつくりとした歩調で歩いて来た。皆、
だらしなく学生服のボタンを外し、肩を
怒らせながら歩いていた。

「よう、色男。ベッピンさんを二人も連
れていいご身分だな」

先頭を歩いてきた茶髪の少年が、卑し
そうに笑いかけてきた。少年といつても
顔立ちや身体つきは、大人と変わらない。

身長が百八センチ以上あり、目付き
が鋭く全身から禍々しいほどの悪意を発
散させていた。少年の名は、工藤亮介。
X学園の総番長として、生徒から恐れら
れている存在だった。地元暴力団組長の
息子であり、校内に拳銃やドスを密かに
持ち込んでいるとも噂されていた。

「……」

少年は鋭い目付きで、茶髪の少年を見
返した。相手の少年達に緊張が走り抜け
た。

その時、校内放送が流れて来た。それ
は、あらかじめ電子的に合成されたもの
のようで機械的な口調だった。

「校内の生徒および先生方、至急教室に
お戻りください。緊急事態です。我国と
中国は先ほど交戦状態になりました。本

校は所定プログラムにより、閉鎖されま
す」

「何だって！戦争がオツパジマリヤガツ
タ！」

校内にいた少年達は一斉に教室ではな
く、出口へと向かった。廊下には少年達
の上げる靴音が満ちていた。

大勢の生徒達が出口近くに佇んでいた。
出口は、分厚い鋼鉄製の扉によつて塞が
れていた。

「何で！出口が閉まっているんだよ」

「俺達は閉じ込められたのか？」

少年達が苛立たしげに不平を漏らして
いた。

「君達、すぐに教室に戻るのよ」

不安げに佇む少年、少女達をかき分け
るように、美貌の女教師が扉の前に出て
きた。大学を卒業したての新米英語教師
であった。江藤香織。年齢二十四歳。容
姿は学校に不釣合いなほど美しかった。
ミニスカートからはみ出した太腿が妙に
艶かしかった。

「教室に戻って、どうなるっていうんだ
よ。俺は家に帰りたいんだ」

6
近くにいたニキビ面の少年が食い下が

つてきた。

「いいから、教室に戻りなさい。校内放送で校長から説明があるのよ」

「校内放送だったら、ここでも聴けるぜ」
総番長の工藤亮介が、いつの間にか、香織のすぐ近くに立って、全身を舐めるように見詰めていた。香織は、亮介の視線に怖気立つものを感じた。

「いいから、言うことを聞きなさい」
亮介をたしなめる香織の声は、僅かに上擦って聞こえた。

「はいはい。わかりましたよ。お前達、さっさと教室に戻りな！」

亮介が周囲にいた生徒達を睨み付ける様に言った。生徒達は雲の子を散らすように各教室に戻って行った。その場に残されたのは、教師の香織と、亮介とその子分達だけであつた。

「あなた達も早く、戻りなさい」

「先生。いや香織ちゃん。俺はこの学校のシステムを知っているんだぜ。戦争が始まったら、地上と隔絶されちまうそうじゃないか。ということとは、マップも俺達に手を出せないということだろう？」
亮介は、蒼白な表情で震えだした香織

の両肩に手を載せて、瞳の奥を覗き込んできた。

「……」

「それにしても、いい乳してるじゃないか。吸わせてくれよ」

「兄貴。俺は香織のケツを見たいよ」

背後にいた子分達の間、薄笑いが広まっていく。皆、一様にだらしない笑みを浮かべながら香織の全身を舐めるように見ていた。

「焦るな。俺が抱いたら、お前らにも好きなだけ犯らしてやるよ」

「冗談は止めなさい！そんなこととして只で済むと思ってるの？」

香織の美しい顔は、恐怖のために青ざめていた。

「冗談なんかじゃないぜ。俺は欲しいものは、絶対に手に入れる主義なんぞでね」

亮介は、香織に抱きつき、ミニスカートのたくし上げ、ストッキングとパンティの隙間から深い尻の割目に手を差し入れて、アヌスを指で刺激した。

「いや！誰か来て！助けて！」

8
く香織を、亮介と子分達は一斉に担ぎ上

げ、廊下を闊歩していく。

隆一と美佐に里香は教室には向かわず、学校で最も地階である地下三階に向かつていた。

非常灯のみが点灯する階段の踊り場には三人は、少しの間、佇んでいた。目的地である理科実験室に続く廊下は、分厚い防火扉で行く手を阻まれていた。

里香が天井に設置されているTVカメラに向かつて大きく手を振ると、防火扉はゆっくりと開き始めた。

「最近、随分とご無沙汰しているじゃないの」

廊下の最も奥に位置する理科実験室で、三人を出迎えたのは、黒縁メガネをかけた痩せ型の少年だった。

「何かと、忙しかったんだ」

隆一は、ポケットに両手を入れたまま、目の前の少年に軽く挨拶をした。

「部長、随分とリラックスしているのね。上じや戦争騒ぎで大変なんだから」

美佐が、隆一の腕を掴みながら黒縁メ

ガネの少年に話しかけた。部長と呼ばれた黒縁メガネの少年は、物理科学部の部長をしている、田端大輔という名の校内では成績最優秀の生徒だった。

「ここは安全性。俺が美佐ちゃんのことを守ってやるから」

「なあんだ。加藤君も来てたんだ。私には隆一がいるから心配ご無用よ」

美佐は横から声をかけてきた茶髪がかった長髪で、長身の少年に舌を出して、ぷいと横を向いた。

その少年は、優しそうな笑みを浮かべながら、美佐の横顔を見詰めていた。

加藤絃一も黒メガネの大輔と同様に学業優秀な生徒だった。部員では無いのであるが、大輔の親友であり、部室にはよく出入りしていた。国際的に有名な化学者であり、国立大学の教授である父を持ち、化学には並外れた知識を持っていた。

「あら、里奈ちゃんも来ていたのね？」
美佐同様に隆一にまわりついていた里香が、部室の奥でパソコンの液晶ディスプレイを覗き込んでいた女子生徒に声をかけた。

10 「今、ちよつと忙しいところなのよ。中

国共産党本部のサーバにハッキングして
いるところなの」

セミロングに金縁メガネをかけた才女
風の生徒が、ディスプレイから目を逸ら
さずに答えた。香月里奈。彼女もずば抜
けた秀才であり、高校三年生でありなが
ら、情報工学のスペシャリストであった。
メガネをかけていて、髪もあまり手入れ
をしていないが、メガネを外せば、里香
や美佐に劣らぬほどの美女であった。

「中国共産党のサーバに侵入して、どう
しようというのよ」

今度は美佐が、興味を示したようだ。
隆一から離れ、里奈に近付き背後からデ
イスプレイを覗き込んだ。

「軍部のデータベースにアクセスして、
攻撃計画を盗むのよ。それが済んだら、
ウィルスを仕込んでやるわ」

「そんなことが可能なのか？」

いつの間にか隆一も、里奈の背後に立
ち、ディスプレイを覗き込んでいた。

「一年ぐらいかかるけどね」

里奈はディスプレイから目を放し、隆
一達の方に振り向き真顔で答えた。

11 「やめとけよ。今はもつと重要なことが

あるだろう？」

茶髪で長身の加藤絃一が、うんざりしたように言った。

「もっと大事なことって何よ」

里奈が、加藤の顔をじつと見詰めた。

「このパソコンは校内のシステムにも繋がっているんだろう。監視カメラにもアクセスができる」と聞いたが」

「できるわよ。見たいの？」

「ああ、見たいね。俺達はここに閉じ込められたんだ。工藤達の動きが気になる」

「あんな馬鹿に興味があるの？」

「あいつは、馬鹿だが、喧嘩はめっぼう強い。それに悪党だ。きつと何かを企んでいる筈だよ」

「いいわ」

里奈が再び、パソコンに向かい、電撃の速さでキーボードにコマンドを打ち込むと、監視カメラの画像が表示された。

そこには工藤達が英語教師の香織を運び込んだ体育館内にある倉庫が映し出されていた。そこにいた全員の視線がディスプレイに釘付けとなった。

12 全裸にむかされた香織が陵辱されている様子が映し出されていた。

「ヤッパ。大人の女は違うぜ」

制服を着た亮介が、全裸で仰向けの姿でマツトに横たえられている香織の股間から愛液に塗れた顔を上げた。周りでは子分達が、その様子を食い入るように見詰めながら、自らの男根をむき出しにして、呆けた様に自慰を行っていた。床には香織の衣服が散乱していた。

「お願い、もう止めて。許して……」

香織が両手で顔を覆うようにして、咽び泣いていた。

「お前達も舐めるか？ 浩太。お前ケツの穴が好物だったな。いいぞ、舐めてみる」

亮介は香織をマツトの上に四つん這いにさせ、浩太という名の少年に向けて豊かな尻を突き上げるような格好にさせた。「いいのかい？」



身長が百九十センチ以上ある、この中では最も長身の少年が、ゆっくりと香織の美尻に向けて顔を下ろしていく。

両手で尻の膨らみを掴み、深い尻の割目を覗き込んだ。そこには無毛でサーモンピンク色のきれいなアヌスが息づいていた。鼻先をアヌスに押し付け匂いを嗅いだ。ウオッシュレットを使っているのか、異臭はしなかった。

亮介による愛撫のためか、膣は濡れており、隠微な匂いが鼻腔を刺激していた。浩太は思わず深呼吸をしていた。香織の匂いを全身で楽しみたかった。

「何ぐずぐずしているんだよ。早く舐めちまえよ」

亮介が香織の膣を指で弄りながら、満面の笑みを浮かべ浩太の肩を軽く叩いてきた。

浩太は、香織のアヌスに喰らいつき、激しい勢いで吸い舐めた。周りで見ていた少年達が、一層激しく自らの男根を擦り始めた。

「いや。そこは止めて！」

香織が背筋を仰げ反らせて絶叫した。

15 「美味しいよ。最高だよ。亮介」

「そうだろう。じっくり舐めてやりな。それにしてもいい乳してるぜ」
亮介は、香織の両乳房を乳絞りの要領で揉みしだいていた。他の少年は、嗚咽に咽ぶ香織の口に吸い付き口蓋を舐めていた。

英語教師の香織が、全裸でマットの上
に亮介によつて組み伏せられていた。亮
介の黒々とした男根が、香織の膣を犯し
ていた。

寝ていても崩れない盛り上がった乳房
を亮介の手が握りつぶした。香織は泣き
はらした顔で、天井をぼんやりと見詰め
ていた。これまで何不自由無く暮らして
きた人生が、音も無く崩れていくのを感じ
ていた。

亮介が「うっ……」という喘ぎ声を上
げて香織の膣内に精液を送らせた。

「先生。最高に気持ちよかつたぜ」
亮介は、淫らな笑みを浮かべながら、香
織のアヌスを指でかき回した。

16
浩太が水を入れたバケツと雑巾を持つ
てきて、精液に塗れた膣を力任せに拭き

だした。きれいにした後で、股間に喰らいつき、ガツガツといった感じで膣を舐めた。

香織をうつ伏せにさせて、背後から男根で貫いた。浩太の背後には順番待ちの生徒達が、男根を扱きながら淫らな笑みを浮かべ、談笑していた。

陵辱は限りなく続けられた。二十代前半の瑞々しく、かつ成熟した裸身は、生徒達にとり極上の柔肉にすぎなかった。

貪り性欲の限りを吐き出した。

香織は再び泣いていた。涙が止めなく溢れてくるのを止めることはできなかつた。屈辱感とともに激しい快感が背筋を走り抜けた。膣内に精液が迸るのを感じながら意識を失った。

物理科学部の部室では、隆一達がディスプレイで繰り広げられている光景を見詰めていた。

「先生を助けなくちゃ。加藤君。電話で校長に連絡して」

17
にいた加藤紘一に命令口調で言った。近く

「俺、番号知らないよ」

加藤は黒色の携帯電話をポケットから取り出した。

「内線電話を使えばいいでしょう。それにもう携帯は、電波が遮断されているから使えないはずよ」

「わかった」

絃一は、内線電話が置かれてある机に走り、受話器を耳に当てすぐに戻した。

「駄目だ。通じないよ。いったいどうなっているんだ」

「ちよっと待って。調べてみるわ」

里奈は、パソコンのキーボードを目にも止まらぬ速さで操作した。

「誰かが、校内の電話システムを使えないようにしたようね。空調や電源設備は問題ないようよ」

「何のために？」

隆一が里奈の背後から、ディスプレイを覗きこみながら尋ねた。

「わからないわ。私達が連絡を取り合うのを嫌っているみたいね」

「俺が様子を見てくる」

隆一がドアの方に向かった。

「私も行くわ」

「私も連れてって！」

美佐と里香が隆一の後が続こうとした。
「駄目だ。ふたりは此処にいるんだ」

隆一は振り返り、二人を両手で押し返した。

「こいつを持って行け」

部長の大輔が、小型のノートパソコンと長さが五十センチ、太さが五センチほどの金属製の棒を手渡した。

「何だ？」

「ノートパソコンには無線LANがセットしてある。メールは使えるだろう？ それにこいつはレーザー射出器だ」

「レーザー銃ってことか？冗談だろう？」

「玩具じゃないぜ。工作機械用のレーザー加工器を改造したんだ。リチウムバッテリーで駆動する。容量が小さいから十発しか撃てない。しかも、拳銃のような威力は無い。せいぜい、火傷を負わせるくらいだ。だが、目に当たれば失明する。亮介は拳銃を持っていて、という噂だからな。飛び道具には飛び道具で対抗するんだ。ここが射出口で、これが引き金だ」

大輔は真顔で説明した。

19 「お前、こんな物を作っていたのか？」

隆一は大輔の顔をまじまじと見詰めた。
「こいつも持っていけよ。それだけじゃ
心持とないからな」

加藤が、隆一に手渡したのは、ガンブ
ラックを塗ったモデルガンの自動拳銃だ
った。

「これはモデルガンじゃないか」

「そうだよ。電動ガス式で連射可能だ。
だがな。ただのモデルガンじゃないよ」

加藤は隆一に、掌に乗せた二個の直径
六ミリほどの黒い弾と赤い弾を見せた。

「これはB B弾だろ？」

「見かけはそうだけど、黒い弾は鋼鉄よ
り十倍硬い超合金製なんだよ。それにガ
ス圧を高めているから、貫通力は拳銃弾
並みなんだ。こっちの方の赤い玉には、
内部に爆薬のオクタニトロキュバンを封
入している。ニトロの二倍以上の威力が
ある。一定以上の衝撃で爆発する仕組み
さ」

「お前達、部活で何やってたんだ？」

隆一が呆れ顔で言った。

「皆には内緒にしてくれよ。内申に響く
からな」

「そんなもんじゃ済まされないぞ……」

「まあ、いいって。弾装は二つある。黒い方と赤い方にはそれぞれの弾が三十発入っている」

「あと、これを制服の下に着るんだ」

加藤が机の引き出しから、防弾ベストを取り出した。

「こんな物まで……」

隆一は、加藤から防弾ベストを受け取り、制服の下に着た。

「用心のためだ。俺達の中で亮介に対抗できるのは、隆一。お前だけだからな」

「お世辞を言われたって何もでないぜ」
「香織先生を救うことができたなら、里奈

を好きにしてもいいよ」

部長の大輔が二人の間に割って入ってきた。

「何言っているのよ。冗談じゃないわ！」

里奈が椅子から立ち上がり、大輔の顔を睨みつけた。

「冗談だよ。お前は俺の女だ。隆一なんかに渡しはしない」

「私がアンタの女だって！誰が決めたのよ」

「そうじゃなかったのか？」

21
里奈は近くにあったほうきを頭上に

高々と振り上げた。

「済まない。訂正する。勘弁してくれ！」
大輔が両手で頭をガードしながら逃げ出した。里奈が両目を吊り上げて大輔を追いかけた。

「気をつけろよ。隆一。亮介は頭がいかれちまったようだ。何をするかわからん。もう行った方がいい」

加藤が、ディスプレイを指差した。画面には、五人目の生徒が英語教師の香織に背後から抱きつき、豊かで真つ白な尻を抱く様子が映し出されていた。

香織は意識を失っているのか、人形のような動きだった。

隆一は体育館内の倉庫に向かった。片手には加藤から貰ったモデルガンを握り締めていた。体術だけで亮介達を叩き伏せる自信があったが用心のためだ。ドスや拳銃を持ち出してくる可能性が高かった。

22
体育館の両扉は締まっていた。取手を引いてみたが、鍵がかけられているらしく開くことは無かった。隆一は軽くステップを踏んだ。次の瞬間、疾風とともに

前蹴りが大扉に突き刺さった。厚さ数センチ以上もある扉が、吹き飛んだ。

間髪を入れず体育館に走り込んだ。倉庫から物音を聞きつけて、亮介の子分達数名が走り出してきた。ざっと見て、ドスや拳銃を持っている者はいなかった。

隆一が飛び上がり、子分達の頭上から回し蹴りを見舞った。数名が一気に壁際まで吹き飛んだ。皆、一撃で意識を失い床に倒れ付した。

「相変わらず、強いな。隆一。でもこいつには適うまい」

自動拳銃のコルトガンメントを手にした亮介が、倉庫のドアに凭れるようにして立っていた。

「先生を渡せ」

隆一は、亮介に気つかれぬように背中側のベルトに指したモデルガンの銃把を掴んだ。

「渡して下さいだろ。最も渡す訳無いけどな。いいか、隆一。学校にいるスケはすべて俺様のものだ。センコウだって例外じゃない」

「狂っているな。お前」

「狂ってるだって。冗談だろう。強い者

が好き勝手にして何が悪い。いいか隆一。今、極上のスケが十人はいるんだぞ。ハレムじゃないか？ いいことだけじゃないぞ。食糧だって無いんだ。何もしなければ飢え死にするだけだ。美人とまでいかないが、美味そうな女達が二百人もいるんだ。最悪食糧にすればいいさ」

「女達を食べるって。お前、本当にいかれちまったな」

「食うものが無いんだ。仕方が無いだろう？ それよりお前、俺の子分にならないか？ お前の腕なら極上のスケを三人与えてもいいぞ」

「いつまでもほざいていやがれ」

隆一がモデルガンを構えると同時に、亮介のガバンメントが火を噴いた。隆一は胸に衝撃を感じて仰け反った。視線が定まらぬまま、モデルガンを目蔵撃ちに連射した。一発が亮介の右耳朶を吹き飛ばし、一発が拳銃を持っていた右腕を貫通した。亮介は、ガバンメントを落とし、右腕を押さえてその場に蹲った。

「先生を渡せ。今度は汚いケツを撃ち抜いてやろうか？」

24 その時、床で伸びていた筈の少年が、隆

一の足に掴みかかってきた。隆一はバランスを崩して、床に転がった。「覚えてやがれ。貴様を八つ裂きにしてやるぜ」

亮介は捨て台詞を吐きながら、出口に向かつて疾走した。隆一は起き上がり、向かつてくる亮介の子分に蹴りを喰らわせた。

「開けてくれ。俺だ」

物理科学部のドアが開き、大輔達部員が隆一を向かい入れた。隆一は両腕で英語教師の香織を抱いていた。香織は意識を失っており、全裸だった。

「先生の衣服はどうしたの？」

里奈が前に出てきて、医師のような目付きで香織の全身をチェックした。

「ナップザックに入れてきた。着させている時間が無かつたんだ」

「先生を介抱しなきゃならないな。俺がやる」

大輔が隆一の腕から香織を奪い取ろうとした。

「汚いぜ。大輔。先生の面倒は俺が見るんだ！」

今度は加藤がふたりの間に割って入ろうとした。

「あんた達、男は駄目よ。これは女子の役目だわ」

里奈が大輔と加藤を両手で押して、部屋の隅に追いやった。

「私達も手伝うわよ」

美佐と里香が真剣な面持ちで、里奈に近づいた。

「こつちに運んで」

隆一は里奈の後ろに続いた。部室には、もう一部屋繋がっていた。二十畳ほどの部屋にはソファセットやダブルベッドが置かれていた。

「こいつは何なんだ？」

「大輔が、倉庫を無断で改造したの。シヤワートイレ付よ。まず、先生の身体をきれいにしなくちゃね」

里奈はいきなり、着ていた制服を脱ぎ始めた。

「どういうことだ？」

「シヤワ―で先生の身体をきれいにするのよ」

26 隆一は着ていた衣服をすべて脱いで、
隆一の前に立った。豊かな乳房や股間の

陰影を隠そうともしない。里奈の素肌は瑞々しく、どこにもシミひとつ無かった。「俺はどうすればいい？」

隆一は里奈から視線を逸らせた。声が微かに上擦っていた。

「バスルームに先生を運んで欲しいの。あら、隆一。照れているの？」

「……」

「隆一も裸になって。女子だけで先生を運ぶのは大変なのよ」

「俺も裸になるのか？」

「隆一が裸になるの！」

それまで黙って二人の会話を聞いていた美佐と里香が、黄色い声を出した。

「わかった」

隆一は一言だけ言い、香織をベッドに横たえてから、学生服を脱ぎ始めた。美佐と里香も競うように制服を脱ぎ始めた。

「こんなことなら勝負下着を穿いて置けばよかったわ」

「何言っているのよ。隆一は私のものよ」
「準備OKだ」

27
隆一も里奈同様、素っ裸になった。手足が長く、鍛え抜かれた鋼のような肉体に女達の視線が釘付けになった。股間を

軽く押さえていた。女達の裸身に反応してか、大きく勃起していた。

「ワーオ！ここは正直ね」

里奈が隆一の前で中腰になり、食い入るように見詰めていた。今にも手を出しそうな雰囲気だった。

「早く、先生をきれいにしてあげよう」

隆一は女達の熱い視線から逃れようと、全裸で失神している香織を抱き上げ、バスルームに向かった。

「大人の女って、すごくエロイ身体しているね」

香織の下半身をシャワーのお湯で洗いながら美佐が、感心したように言った。指先を膣口に差し込み、感触を確かめていた。

「アంతの身体の方がエロイは」

香織の乳房を石鹸のついたスポンジで洗っている里香が、からかう様に言った。乳房を洗いながら、乳首を吸ったりした。「ちよつと、シャワーを貸して」

28 里奈が美佐からシャワーを受け取り、ヘッドの部分を外してから、ホースの先端部分を香織の膣口に差し込んだ。すぐ

に膾口から温水とともに白濁した液体が噴出してきた。赤く腫れ上がったアヌスにも同様な処置を行った。

「奴らの汚い精液を洗い流さなくちゃね。ちよつとアンタ達何やっているのよ！」

美佐と里香が、床に尻をついた隆一に纏わりつき、男根を奪い合っていた。

「里奈。何とかしてくれよ」
隆一が情けない声を出した。美佐が隆

一の男根を呑み込んでいた。
「仕方無いわね。先生の身体はきれいに

なったわ」
里奈が隆一に近付き、股間を顔に押し

付けるようにした。
「私のこどもきれいにして」

里奈が甘えた声を出した。高校生とは思えぬ、豊かな尻を妖しくくねらせた。

「随分と時間が掛ったじゃないか」
部室で隆一達を待っていた部長の大輔

が、不満そうな顔で隆一達を出迎えた。
「色々とあってね。先生はベッドで眠っ

ているわ」

29 男達に説明した。
里奈が洗い髪をタオルで拭きながら、

「おい。隆一。どうしたんだ？何かやつれたみたいだぞ。それに髪も濡れているし。もしかして、お前俺の里奈ちゃんと……」

大輔が唾を飛ばしながら、興奮した面持ちで言った。

「アンタには関係ないでしょう。あんまりシッコイと辞めちゃうわよ」

里奈が腕組をして大輔の顔を睨みつけた。

「ご・ご免。お願いします。部を辞めるなんて言わないで下さい」

大輔が里奈の前で土下座して、頭を床に擦りつけた。

「わかったら、それでいいのよ」

里奈が大輔の頭の近くに屈みこんで、頭部を優しく撫でた。

「里奈。大輔が覗いているわ」

美佐が言うとおりに、大輔がスカートの間に見える股間を食い入るように見詰めていた。里奈はパンティを穿き忘れていたのだ。

「オリコウサンにしていたご褒美よ」

里奈はスカートで大輔の頭を包み込んだ。

「幸せであります！何ていい匂いなん
だ」
「駄目よ。誰が舐めていいなんて言った
のよ！」
里奈が大輔の顔を裸の尻で踏みつけに
した。床の上に大の字になり横たわる大
輔の股間が大きく膨れ上がっていた。

第二章	魔性の女教師
第三章	食料探し
第四章	人肉料理
第五章	人食いチンパンジ
第六章	死闘
第七章	エピソード